

八 幡 橋

はちまんばし

深川の富岡八幡宮の傍らにあるのでこの名があるが、もともとは名前も場所も今とは違っていた。もとの名前は弾正橋、東京府の発注で工部省赤羽製作所が製作し、鍛冶橋と八丁堀の間の楓川に、明治11年（1878）に完成した。赤羽製作所は、東京タワーの下^{だんじょう}の赤羽橋辺りにあった工場である。赤羽は赤羽根とも書いた。また赤羽工作局とする文献もあるが、時代によって呼称が異なるだけで、同じ工場である。楓川は現在首都高速一号線になっている。

八幡橋の材料は、アーチ部は鋳鉄、アーチ下端を結ぶ水平材や腹材は鍛鉄である。古くからこの橋の材料は国産といわれているが、それもすべて国産とする説、いや鋳鉄材は国産だが鍛鉄の方は輸入かも知れないという説、いろいろある。明治22年から明治39年まで東京府で橋梁の仕事をして、功績大であった金井彦三郎が、「鋳鉄は赤羽工作局の製品」と断定していることからみて、鋳鉄が国産品であることは間違いない。

大正2年（1913）、市区改正事業によって、数十m上流側に新しい橋ができた。このとき弾正橋の名は新橋に移り、原位置のままの元の橋は、元弾正橋と呼ばれるようになった。

楓川上で関東大震災にも耐えた弾正橋は、震災復興計画による道路拡幅で、昭和4年（1929）に架け替えられた。撤去した旧橋を移設したのが、今日見る八幡橋である。幅員はもと9mあったものが、移設後2mに狭められ、歩行者専用橋として生まれ変わった。床組は全面的に改造された。昭和52年（1977）には国の重要文化財に指定され、現在江東区によって大切に管理されている。

八幡橋の形式ボーストリングの由来は、bow & string、ボーは「アーチ」を、ストリングはアーチ下端をつなぐ「弦」を意味する。ボーストリングにはアメリカ流とドイツ流とあるが、八幡橋はアメリカで鉄の橋の父といわれるホイップル（1804～88年）が広めたアメリカ流である。八幡橋を仔細に見ると、部材の断面形から連結方法まで、ホイップルの標準設計そのものである。八幡橋日本人設計説もあるが、舶来の標準設計図そのまま、あるいはわずかに手を加えて製作・架設したとみるのが妥当なところであろう。

本家のアメリカには、昔はホイップルのボーストリング橋は無数にあったが、現在では、1860年に架けられた2橋が残っているだけである。そうしたことで、八幡橋はアメリカにも貴重な文化財として認められ、平成元年には米国土木学会の賞が授与された。顕彰のレリーフを、橋下の遊歩道の傍らに見ることができる。

もうひとつ。現地を訪れる方は、床組側面のピンの頭を見ていただきたい。菊のご紋章が付いている。由来は不明だが、当時としては国家的モニュメントであったためかも知れない。

〔NT〕

竣工年月：昭和4年（1929）

所在地：東京都江東区

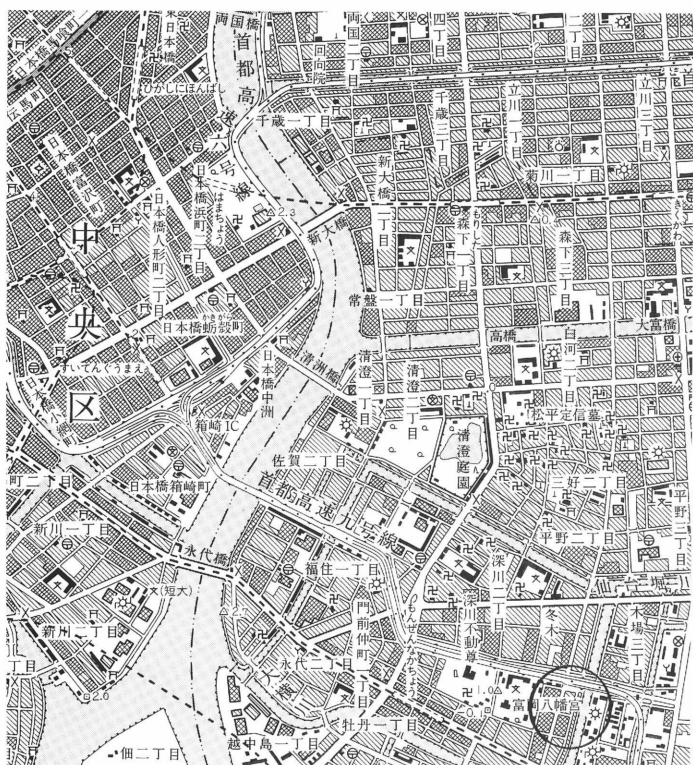
橋長・幅員：15.76m × 2.0m

径間数・支間長：1 × 15.11m

形 式：ボーストリングトラス（ピン結合）



〈1994年5月，撮影・共に成瀬輝男〉



(1:25,000 東京首都)



ピンの頭に菊の御紋章が見える。